

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

⑥その他

《人社系》

●京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻
「研究と実務を架橋するフィールドスクール」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

現地語でグローバル社会、ローカル社会を理解できるような教材、換言すれば現地語新聞・公文書の読解や、臨地調査の過程で必須の専門用語、あるいは現地独特の知を表す概念語等を採録し、説明を付した用語集(現地⇄日本語)を、教員が編集し、フィールドスクールに提供して、参加者のその後の研究・実務の過程に役立てることを目指した。アラビア語教材開発を主にすすめたが、アジア・アフリカの諸言語を網羅することは困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

多様な地域と学問分野にまたがる地域研究では、それぞれの対象地域・専門分野によって使用する現地語・専門用語は大きく異なる。そのため研究者の数だけ用語集が必要となり、全体に共通する教材を開発することは困難であった。フィールドスクールでは、当該地域を専門とする教員が指導を担当したので、現地で直接教授することとなった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

研究科が本プログラムと並行して実施している、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(I T P)「地域研究のためのフィールド活用型現地語教育」と連動して、アジア・アフリカ地域研究に必要な言語習得を教授するセミナー(プラクティカル・ランゲージ・セミナー)を継続的に開催したことで、現地語教育を推進することができた。

●奈良女子大学人間文化研究科国際社会文化学専攻、社会生活環境学専攻
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ・アカデミックな基盤を専門基礎群と専門応用群により培い、さらにスキルや専門応用力を高める実践基礎群および実践応用群を履修するという、体系的カリキュラムを編成したが、大学院生の多様なニーズに対応する内容の実践的科目を量的に十分に開設することは難しい。
- ・一般に人社系大学院では、広い分野に共通する技能・技術は明確ではなく、仕事に対する態度や姿勢の形成がまずそれらの基礎をなすと思われる。技能・技術のレベルでは、大学院生の進路の多様性に応じて多様な能力が要求され、それらに対応するだけの多様

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

な授業を開講することは實際上困難である。本プログラムでは、多彩なゲストスピーカーを招へいし、授業選択を弾力化したが、十分とは言えない。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ・本プログラムでは、できるだけ教員の経験を生かして高度専門職業人の養成という目的に沿って、スキルを身に付ける実践的な科目の開設に努めたが、それだけでは不足する部分もあるため、実務経験を有する適任者を学外から非常勤講師やゲストスピーカーとして招聘した。しかし、受講生へのアンケート結果によれば、全ての項目について総じて補助事業期間を通じて高い評価を得ていたが、「社会に出てから直接・間接的に役に立つ内容であったか」という設問に平成22年度前期のみ否定的回答が約3割みられ、大学院生の多様なニーズを必ずしも十分に把握し切れていなかったのではないかと反省がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ・人社系の大学院生の多様なニーズにマッチする内容の実践的科目を十分に提供するためには、ニーズの把握に努めるだけでなく、学内の教員だけでは必ずしも十分ではないので、ニーズにマッチした外部の人材について情報を収集したり、招聘できるような人脈づくりを行う等の日常的な取組も必要であろう。

●上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻

「現地拠点活用による協働型地域研究者養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

博士前期課程については標準修了年限内での学位授与をほぼ実現しているが、博士後期課程については、博士論文提出資格試験、外国語能力試験から博士論文セミナー、博士論文計画書提出を経て、博士論文を提出する一連の過程を見直し、これらの制度の標準化を進めたものの、不必要に長期在学する学生などがいなくなるなど限定的な効果はあっても、根本的にはあまり改善できなかった。結果として、博士号の学位授与自体はほぼ確実に実施されているが、所要の期間は5年以上となり、満期退学後の特例による課程博士号の取得が通例となる状況はなかなか改まらなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

現地調査を重視した地域研究という学問の性質上、博士論文の執筆に2年以上の長期現地調査を実施することが必須であり、このことが3年以内の学位授与を困難にしている。標準修了年限内の学位授与は、本教育プログラムの主たる狙いとするところではないが、

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

我が国の大学院教育の全体がその方向に向けて動いている以上、学生のキャリアパスの観点からも何らかの対応を迫られている。ともすると学生の「フィールド力」の涵養という本プログラムの主目的から、より高度でより長期の調査の実施を学生に要求すること自体が矛盾した目的設定となりかねず、学生の研究意欲への影響を含めて対応が苦慮された。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

国内にいて博士後期課程に在学している期間中の研究の諸段階や、現地での調査地選定や許可取得手続きの効率化などの対応を図る他、実質的な対応として本専攻と関連するアジア文化研究所、イベロアメリカ研究所、イスラーム研究センターなどの共同研究所員などの身分、あるいは日本学術振興会特別研究員、上智大学 PD などの職による研究継続を支援して、円滑な学位取得に配慮する形をとってきたが、根本的には一貫性博士課程への制度改変を行い、1年間の準備期間と2年間の調査期間、2年間の博士論文執筆期間を設けることで、この問題は解決することができるのではないかと思われる。本プログラムの実施期間中の実現は困難だったが、今後の課題として検討したい。

●南山大学国際地域文化研究科国際地域文化専攻

「多文化社会対応企業人・教員養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本教育プログラムの取組を通して、国際地域文化研究に関わる専門的知識・方法論とスキルの獲得の支援・促進、ならびに実践的学問の追求に主眼を置き、研究科のカリキュラムとの連携を目指した。しかし、個別に見れば、関係する授業科目(「地域研究方法論」、「国際地域文化プロジェクト研究」、「英語表現研究 I・II」等の授業科目)においてはその個々の目的を達成し得たものの、これら授業科目の内容面ならびに授業担当者間での相互の連携を構築することができず、全体として、本教育プログラムの研究科大学院教育に対する波及効果を十分な形で生み出すことができなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

本教育プログラムに関連する上記の授業科目の内容が各担当教員に委ねられ、教育プログラムの取組の目的と研究科のカリキュラムとの全体的関連について、研究科所属教員間で認識を全体的に共有し、運営面で関連授業科目の相互連携を図る仕組みの構築が不十分であった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

研究科委員会等で、もとより教育プログラムの全体的取組内容については逐次紹介してきたが、必要に応じて、教育プログラムの展開のなかで関係する個別の授業科目がどのように展開されているかを報告すると同時に、関係する授業科目の相互連携を進めながら大学院教育の充実をいかに図るかに関して研究科を構成する教員の間で情報を共有し、改善に向けてレビューする仕組みを研究科として確立するような対応が必要であった。

《理工農系》

●大阪大学工学研究科生命先端工学専攻

「国際連携大学院 FD ネットワークプログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

海外の大学院から招聘した著名教授による講義を大学院博士前期課程（一般コース）の講義科目として開講し、留学生と一緒に日本人学生に受講させた。また、英語コースで開講している科目を一般コースの講義科目として開講し、留学生と一緒に日本人学生に受講させた。しかし、日本人学生の受講者数は10名程度にとどまり、一般コースのすべての日本人学生に受講させることは極めて困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

海外から招聘した著名教授による講義科目にしても、英語コース向けに開講している講義科目にしても、一般コースの日本人学生の受講者数が少なかったのは、英語による講義科目がすべて必修科目ではなく選択科目であったことと、英語による講義科目を受講しなくても日本語による講義科目を受講するだけで大学院博士前期課程修了に必要な単位をすべて取得できるためであると考えられる。従って、国際化に対する意識が大きく向上し、国際レベルの研究能力が飛躍的に向上したのは日本人学生の場合、一部の学生に限られる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

一般コースのすべての日本人学生に、英語による講義を受講させ、これらの学生の国際的視野を高め、国際的な競争力を身につけさせるためには、講義はもちろん、ゼミナール、研究指導、発表、事務連絡をすべて英語で行なう必要がある。すべて英語で教育・研究を行なっている英語コースのカリキュラムと一般コースのカリキュラムを完全に一元化し、英語による講義を受講しなければ大学院博士前期課程修了に必要な単位を取得できないようにすれば、おのずから、英語による講義科目を受講する日本人学生の数は増加し、その結果、大学院教育の国際化は格段に進むと考えられる。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

●九州大学生物資源環境科学府

「生物産業界を担うプロフェッショナル育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

労働集約的な部分が多く、教員側のマンパワー不足があった。

系統学習と比べると学習者へのプレッシャーをかけないので、学習集団に対して均質な学習効果を予測することが困難であり、継続的な参与観察が必要であった。

学習者が持っている価値観や文化的背景がグループ学習の形態や運営にどのような効果をおよぼすかが不透明であり、質の高いチュートリアルが必要であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教員側のマンパワー不足。これは、プログラム運営に積極的に関わる教員が少ないことに他ならない。参与観察の重要性が明確化されても、教員数が不足して、最適な支援体制をとることに困難性が生じた。現時点では、積極的に関わる教職員の献身性で補われているが、このようなプログラムやカリキュラムを拡大するためには、マンパワー問題はついて回ることになる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

積極的に関わる教職員の献身性に頼るところが多かった。学内教育支援で、参与観察者養成に向けた OJT プログラムが始まろうとしている。また、積極的な院生をさらに元気にするためのポジティブメンタルヘルスケアについて、九州大学健康科学センターの連携を図った。

九州大学では、平成23年度に基幹教育院という全学的な組織を立ち上げ、学部から大学院まで一貫した基幹教育プログラムの開発を開始した。多岐にわたる専門教育との連携を行いながら行うこととしており、学内的理解とコンセンサスの構築に期待している。

《医療系》

●広島大学医歯薬学総合研究科創生医科学専攻

「バイオデンティスト育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

診療との調整を付けやすくするため、曜日、時間帯を可能な限り固定して一連の段階を終えることができるよう、さらに複数のコースを設定した。しかし、実際は研究テーマを管理する研究室の行事や診療により、コースワーク期間複数回欠席したり途中退席を余儀なくされる学生が毎回生じた。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容が

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

どのような影響を受けていたのか)

大学院生の演習に対する意識と、医局や研究指導講座の認識不足。欠席した回の内容に関してはコースワーク担当講座が深夜や別日に補講を実施した。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

プログラム担当から、コースワークすべての回への参加を前提とした登録、コースワーク参加に関して研究テーマ担当研究室の大学院生への配慮・協力を再三にわたり促した。しかし、診療・研究に従事しながら科目を履修するというスタイルでは、スケジュール調整に限界があるように感じた。基礎学習期間内は診療から外れる、研究テーマの研究室から離れてコースワーク担当講座に配属されるというようなアメリカ式の対応も検討する必要があるように感じた。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例《非公表プログラムの事例》

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

《非公表プログラムの事例》

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

●事例4

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

副専攻科目については、毎年ガイダンスで説明する等プログラムの周知に努めてはいるものの、日本人学生の履修者が少ない。副専攻プログラムの履修意義を学生全体に浸透させるのはプログラム実施期間内では困難であった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

副専攻履修の意義を学生に伝えるのが難しいうえ、多くの修士および博士学生は、本来の専門分野の研究活動や科目履修で忙しく、専門分野以外の科目にまで目が向かない事が主な要因と考える。また、学生の履修者数を増やすためには、指導教員にも副専攻履修の意義を理解していただく必要がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

毎年初めに実施するガイダンスにて副専攻プログラムの説明を行った。また、大学院で発行する「学修の手引き」に大学院における特徴的な教育プログラムのページを設け周知したが、本プログラムの実施期間内での履修者の大幅な向上には繋がらなかった。本プログラムの履修率を向上させるには、その意義を学生と指導教員が理解しうるような説明とプログラムの履修効果をなんらかの手法で「見える化」する必要がある。